

ジが近世にも受け継がれている。

また『大谷嫡流実記』(一八四五年)は、善鸞を出雲路派本山毫撰寺の開基とする寺伝を紹介し、末法の門徒に専心雑心の分別を明らかにするために、父子合意の上で雑心をよそおい、わざと「御勘気」を蒙ったと『慕帰絵詞』等が伝える善鸞像を記している。ここでは、近世の親鸞像・善鸞像に大きな影響を与えた高田派良空『高田正統伝』が語る「一生御勘当」のような厳しいものと捉えていなかったようである。なお、高田派を含め、江戸時代に「善鸞義絶状」が知られていた形跡を確認できない。

このように、近代的考証が始まる以前の善鸞観は、

一、近世以前より伝わる「邪道をことゝする御子」「不孝無相統」と批判されながらも「大聖の善巧」「御親子御密意」があつたとするやや好意的な評価

二、『高田正統伝』の影響と思われる、「一生御勘当」を受けた者とする評価

主にこの二つの善鸞像が並立していたと考えられる。

近代以前の善鸞像には、非真宗的な傾向があり、関東門流を混乱させ、父親鸞から勘当を受けたという負のイメージがあつたが、それが父の思想にまで影響を与えたとする見方はうかがえない。この善鸞像は近代になって「善鸞義絶状」発見(一九〇〇年)と公開(一九一〇年)、それに伴う近代的考証の始まりによって大きく動き出す。大谷派の佐々木月樵は明治四一年(一九〇八)には義絶状の存在を知っていたが、基本的に『高田正統伝』の記述に拠るなど、善鸞の行状については近世的な

見方を踏襲し、事件の考証には踏み込んでいない(『親鸞聖人伝』)。

このように、善鸞の異解を伝道活動上の方便的行為と見る近代以前の善鸞像は、時代が大正になっても残されていた。しかし、親鸞伝の近代的考証が進み、親鸞自身への評価が高まると同時に、善鸞への負のイメージも強まり、善鸞は父親鸞と相反する「異義者」として、その存在感を高めていくのである。

存覚上人と法華

川野 寛

題目の「法華」とは非常に広義にわたるが、今発表において意味するところは、存覚(一二九〇—一三三三)在世時における天台法華と日蓮宗徒との交渉を論じることが目的である。その交渉を論じるに当たり、まず存覚在世時に浄土宗(浄土真宗)の置かれた状況下を踏まえておきたい。

諸行・念仏併修のなかより、法然の専修念仏の主張、浄土宗の開闢により、念仏は浄土往生の行としてひとり立ち(機根の類化・念仏一行化)をしたのであるが、その専修念仏の顕示は同時に浄土往生の行としての諸行の否定(廢)(弥陀の本願による念仏選択は、同時に諸行の選捨)を意味していたため、延暦寺、興福寺などの有力聖道寺院の訴えにより承元の法難、嘉禄の法難をはじめとする専修念仏弾圧が巻き起こった。その弾圧は存覚在世時にも引き続き起こり、存覚一代記ともいえる『常樂台主老衲一期記』(以後『一期記』に略す)の十四歳嘉元元年(一一三〇三)の条または唯善書状には、鎌倉で念仏停止の

禁令が下り、その撤廃を求めて唯善が奔走した旨が記されている。さらに『破邪顕正鈔』より具体的に「延暦寺の諸僧、山臥・巫女・陰陽師」等より激しい非難を受けていた状況が窺える。それに加え、存覚四十九歳においては備後において教線が拡大する日蓮宗徒との対論に及んでおり、その影響も見逃すことはできない。さらに当時本願寺(大谷本廟)は、山門の青蓮院を兼帯した妙香院門跡の別院・法楽寺の敷地内に位置し、様々な裁許を青蓮院より受けるなど、青蓮院の影響下に置かれていた。

そのような状況下において、巻き起こったのが日蓮宗徒との対論であるが、存覚は三論宗の教判(等・勝・劣)や天台の教判(開会・分別)を駆使し、開会門においては法華と念仏一法異名ということを強調し、差別門においては機根の別において所依の法の異なることを示されている。『歩船鈔』にも一代の諸教一仏の所説であるが、機根万差によって仏教また万別となり、各々有縁の教によりて出離を求むべきことを示されている。法然が一切の機を平等に摂する法として念仏一行を説いたのに対し、機類の勝劣を認め劣機のためには念仏を説くというのは、やや法然以前に逆行した感が否めないが、このような非常に融和的な所論により巧に対外的論難に應對してゆかれたことが窺える。

以上のように存覚においては、日蓮宗徒との交渉において法華と念仏一体にして、ともに仏智一乗である旨を強調しその論難に応じている。そしてその法華と念仏一体の根拠として用いられている論理が阿弥陀三諦説である。日本においては、阿弥

陀三諦説は平安期の著作『観心略要集』等に見られる。阿弥陀三諦説とは、空仮中の三諦に阿弥陀の三字を配当して、その仏名に寄せて一心三諦の理を円観円修するものである。『観心略要集』では観念念仏を強調しつつも、称名念仏もその名号功德の莫大なるをもって推奨されており、阿弥陀三諦説は称名念仏による往生成仏に理論的根拠を与える思想であり、浄土教の称名念仏を、天台の根本真理で裏付けたものである。

さて具体的存覚の著作の上での阿弥陀三諦説であるが、『決智鈔』には、空仮中三諦Ⅱ阿弥陀の三字、本迹二門Ⅱ阿弥陀の功德と示し、法華と念仏一体の理論的根拠とされている。また『六要鈔』では、『顕浄土真実教行証文類』の総序の「円融至徳」を、三諦隔歴に対し三諦円融でもって釈し、「円融至徳嘉号」の所以として阿弥陀の三字に、空仮中の三諦の理が存することをもって論じられている。

存覚『報恩記』における父母に対する報恩思想

谷口 智子

存覚は、『報恩記』において父母に対する報恩を説示している。これに関して先行研究には、存覚が本願寺教団による教権支配を実現するために父母の恩を説示したという見解が存在するが、そこでは当時の存覚の状況や時代背景等が十分に検討されていないと言え難い。ゆえに本稿では、執筆時の時代背景や『報恩記』と同時期の著作の教学的傾向を考慮した上で、存覚が父母に対する報恩を説示した意図について考察する。

まず、『報恩記』の執筆契機には、存覚が置かれた歴史的状